

平和のバトンをつなぐ

直方第二中学校 3年 池田 健心

私はこれまで、戦争とは教科書の中の出来事や、遠い昔の話だと思っていた。しかし、テレビをつければ今この瞬間も世界のどこかで紛争が続き、家を追われる人々が映し出されている。画面越しに見る子どもたちの涙は、決して他人事とは思えなかった。

夏休みに曾祖母から、戦時中の話を聞く機会があった。食料がなく、常に空腹だったこと、空襲警報に怯えながら防空壕へと走ったこと。曾祖母は、当たり前前の一瞬で消えるのが戦争だと静かに語った。初夏、晴天の空である。私達が毎日、好きなものを食べ、友達と笑いあい、安心して眠りにつけること。この「当たり前」は、実は、尊く儚い平和の上で成り立っていると痛感した。

人権とは、命を大切にされ、自分らしく生きる権利のことだ。戦争は、その最も根本的な権利を、大きな力によって一瞬にして奪ってしまう。意見の違いを武力で解決しようとする時、そこに個人の尊重は存在しなくなる。

では、戦争を知らない世代の私達に何ができるだろうか。それは、まず「知ること」と「自分事であること」だと私は考える。歴史から学び、過ちを繰り返さず、今起きている世界単位の問題に目を向ける。そして、私達は身近な人間関係の中で、対話をあきらめないこと。平和とは、ただ戦争していない状態を指すものではない。自分と違う意見や文化をもつ人と認め合い、尊重し、助け合う状態をいうのではないのだろうか。

平和という言葉は漠然としている。しかし、意識して創り出していかなければ、すぐにでも崩れてしまうものである。その第一歩は、隣にいる人の痛みに寄り添う小さな想像力から始まる。私は、曾祖母から受け取った「平和への願い」というバトンを

受け継ぎ、思いやりと対話によって、世界中の誰もが自分らしく生きる未来を築いて
いきたい。